



朝のこない夜はない

小さい善行を積み重ね

習慣にしましょう

副山首 鈴木正修

スイスの哲人ヒルテューが言っています。「どんな行為でも、また、さらに立ち入って言えば、どんな考えでも、それが一度考えられた時は、あるいは行為の場合は、一度何かをしたならば必ず次に同じような行為や同じような考え方が、その分だけ容易に浮かぶものである。そして、それと反対のことをしたり、考えたりすることが難しくなる傾向がある」

これは言わば、習慣とは一回ごとに刻み込まれるという傾向があるので、人は自分自身を教育する場合、あるいは人を教育する場合、この点に注意しなければ



いけないということだと思えます。

ドイツの劇作家シラーも言っています。「悪いことをすれば、必ず悪いことをまたしやすくなる。これこそが、悪いことをする一番のわざわいなのだ」

また、英語に「美德はそれ自身の報酬である」ということわざがありますが、これもつまり、善い行ないの間違いない報酬とは、必ず次の善いことをやりやすくなるということで、そして、さらに善い行ないがやりやすくなり、その人に自然に美德が身についていくということだと思えます。

『法句経』には過去世からの因縁が説かれています。「善行者は過去世に積んだ善行により、現世において再び善行を積み、ついには、我執をすっかり離れ、煩惱の汚れを浄めて、至福の境地である涅槃に入る」

ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』などにも同様に説かれています。現世において、正しい教えを信じ実行できるといふことこそ、過去世に積んだ善行の果報なのです。

偉人と言われるような人たちは、過去世から善行を重ね続けてこられたのだと思えます。

今回、あまり知られていませんが、金原明善という人を紹介します。大した人物です。



昔、静岡県西部を流れる天竜川は、毎年氾濫して沿岸の多くの村の住民は大きな被害を受けました。

浜名郡和田村で代々商売を営んでいた金原明善は、なんとかして天竜川の治水を行ない、人々の難儀を除きたいと念願していました。

そこで明治十年の夏、明善は上京して時の内務卿・大久保利通に陳情したのですが、西南戦争で軍費もかかり、治水事業まではとても手が回らない状況でした。そうした説明を大久保から聞き、明善はそれでも退かずに訴えました。

「わたしの家は、父の代までに蓄積した財産が相当ございます。それらすべてを政府に献納すれば、相当なお金になるはずで。それでなんとか人々の難儀をお助けください」

明善の覚悟に、大久保は心を動かされました。

「裸になつてでも、治水事業をやり抜くつもりか」

「はい。維新の際、あなたさまや西郷先生などが命を投げ出して国に尽くされたことに比べれば、裸になることくらいいなんでもありません」

この一言を聞き、大久保は明善の要請を受け入れました。そして郷里へ帰った明善のもとに、まもなく静岡県から呼び出しがありました。治水事業を始めるが、約束により明善の資産を差し出すようにと言うのです。



朝のこない夜はない (215)

明善は喜んで自分の全財産を献納しました。土地建物はもちろん、布団や食器にいたるまで差し出したのです。今日の貨幣価値で、おそらく十億を軽く超えるものだったと思います。

明善夫婦に残ったものと言えば、風呂敷一枚、手ぬぐい一枚、古げた一足、それに草履の四品だけ。

そこで明善は『四品居士』とあだ名をつけられ、自分でもそれを雅号にしたということです。

天竜川の治水工事が完成してまもなく、明治天皇が浜松に御幸され、明善夫婦と会われました。その折、皇后さまから次の御製を賜りました。

浅しとてせげばあふるる川水の心や民の心なるらむ

いきなり大善行をするのは難しいと思います。しかし、小さな善行を積み重ねて、菩薩道を真直ぐ進んで行きたいものです。